

# 亡き友を偲びて

蒲 生 俊 興

新進裁桑學者として、押しも押されぬ我が樋口君を母校から送り、あの長野の一角に聳え立つた蠶業試験場病理科の開拓者として、新鋭なる蠶體病理學者としての君が有爲なる一步を踏み出されたのも、僅に一年前のことであつた。懐ひば、君が抜群の榮轉を祝福せんとして深更まで、病生理學の將來を語り、互に相携ひて學海に棹すことを契たのも未だ昨日の感がする。

以來天晴な活舞臺の人となつた君は、其の該博なる蘊蓄を傾注せられ、研究に講話に、本縣養蠶家を熱狂せしめたのは又當然の結果であつた。時恰かも、長野の夏秋蠶は空頭病の猖獗に困り、殆ど空前の慘狀を呈し、君が怜明なる頭腦を敏活なる着想の前に、寔に絶好の研究材料を提供することとなり、日夜斯學の研究に、Step by step 偉大なる雄圖を進められ、今や羽翼も殆ど成り、將に蠶絲學界の爲に一大飛躍の期に入らんとするに際し、不慮の災厄の爲め、濫焉として不歸の客なられたのは寔に遺憾の極みである。

君は資性温淳、嘗て人争はず、他を俟つこと極めて寛に、又自ら處するに甚だ淡々、而かも其の間、毅然として侵すべからざるものがあつた。従て人に接するに純情至誠の到らざるなく、事に當て沈着、苟くも迫らず、一度君と交を結ぶものは、自ら春風の如き和氣充溢せるを覺えた。

君はあの巍峨として聳ゆる獨鈷山の麓、西鹽田の一山村に呱呱の聲をあげ、極めて自然美に恵まれた、平和な家庭に人として爲られ、幼少より常に山靈に親しみ、高所に攀づるを以て最善の修練法と心得たらしい。實にや、君の體軀の雄大なるが如く、あの大胆さ、沈思、決斷等の諸徳は寔に吾等をして常に仰慕せしむる所があつた。

あの膽汁性の豊富な而かも之に適當に神經性を混和した、古今の英傑として具備すべき素性の殆ど總てを持ち合はした人格者であつた丈に、吾々は常に君を目して大に將來爲す有る母校の産んだ最も偉大な人物として畏敬して居たのである。今は彼の特徵が却つて悲しき災厄を招くことゝなつたに及んで、世上人傑の輩出は蓋し困難なるものあるを思はしむるものである。噓！

君の豐饒なる智囊を造り揚げた、各般に亘る藏書の中主として生物並に蠶絲業に關するものは尊父並に未亡人の志に因り吾が同窓會に寄贈せらるゝことゝなり、吾等は生前の人格に接するが如く、或種の靈感を覺えつゝ、暗涙の中に贈られた書籍の一部に目を通すことが出来た。

四月二十一日午前十時

樋口兄の訃音に接し母校の内外頓に哀愁の念に包まる、茲に謹んで追悼の意を表す次第である。

× × × × × × × ×

○悼 樋 口 君

榛 嶺 學 人

一、あやし風、吹き挫きけり山櫻

文の林に秀に出でんものを

二、世にまさば學ひのはてに到り得ん

きみぞ惜しけれ身まかりませる

三、時しくの風を寒みか山櫻

あたに散りけり香のみを留めて

○憚 樋口君

生島之里人

一、若きつま、幼き兒等をおきて逝く

君を思へば心に泣かゆ

二、斯之道の、奥かを止めん望さへ

空しく去にし君を悲しき

三、くたひやすき、爾のたまへをまさくこ

君か身の上に見るそくやしき

○樋口君の逝去を惜みて狂歌一首

榛 嶺 學 人

ほさばしる才は樋口の水のごみ

氣もたくましましき君ぞしのばる

(昭和三年五月三日)

## 樋口君を思ふ

林 貞 三

樋口君は長野蠶業試験場報告第二號に載すべき試験場全景を撮影するために、三十尺の電柱に登り、第二回目に高壓線に感電し、遂に、三十三才を一期として世を去られた。

此の樋口君の行爲に對し、無謀の事をしたものだと思ふ方も或はあるかも知れない。然し少しの不満足をも諦めない

(見)